

2013 年 6 月 1 日発行 第 132 号

目 次	
P 1 巻頭言 山田攝子理事	P 8 ペルーの家庭料理
P 2- P 7 古浄瑠璃の世界 ドナルド・キーン先生 越後角太夫	P 9 新入会員を囲む会
P 7 後半 2013 年総会	P10 事務局便り／編集後記

活動に復帰して

港ユネスコ協会理事 山田攝子



港区で結婚生活をスタートして間もない頃、区の広報誌で「港ユネスコ協会」が設立されることを知りました。職場との往復に終始し、地元・地域との関わりが希薄であると感じていた時期であり、早速に、個人会員として入会しました。入会当初は、港区民祭でのコアアクション（寺子屋運動など）や 折り紙での交流活動など、休日の活動に細々と参加していましたが、子育て時期に他区に転居した後は、ブリティンの定期便と「会費納入」のみが会との繋がりという幽霊会員の時期を長々続けておりました。

数年前、ふと 思い立って、20 余年ぶりに当会の総会に出席し、その際、心地よく引き込んでいただき、委員会に所属して活動を再開させていただくこととなりました。社会経験も人生経験も様々である方々が、それぞれの得意分野を持ち寄り、摺合せ、数々のイベントを実現させていく場に関わって、30 年の積み重ねの底力を感じています。

ボランティア団体にありがちな、「創設期のメンバーで固定化」との現象ありません。懐かしいお顔に、新たな出会い。不規則な仕事の合間の、飛び飛びでの参加をお赦しいただきながら、民間ユネスコの精神の下に集う会員との活動と交流を楽しむこの頃です。

当会の会則によれば、「本会は、ユネスコ憲章の精神に基づき、国際的相互理解と協力親善を通じて、社会の発展、さらに世界平和と人類の福祉に寄与することを目的とし（第3条）」、この目的を達成するために、「（1）ユネスコ精神の理解と普及をはかるための事業 （2）国際的文化交流および親善をはかるための事業 （3）地域の教育的・科学的・文化的発展をはかるための事業 （4）その他本会の目的を達成するために必要な事業をおこなう。但し、特定の宗教および政党を支持する活動はおこなわない（第4条）」と定められており、

この目的に賛同する者は、会員になることができ（第5条1項）、「会員は、その活動に積極的に参加し、会費を負担する（同条2項）」ものとされています。

この、「積極的に活動に参加し」の部分は、なかなかハードルが高いと感じられますが、「出来るときに、出来る範囲で」で 受容られることは、上記のとおりです。積極的活動がご無理な方も、お時間があるときに、気軽にイベントにお出かけ下さい。出向かなくとも可能な活動もあります。当会のミンダナオ子ども図書館支援、各地の民間ユネスコ協会が行っている寺子屋運動等のコアアクション協力等、ネット検索で様々な「参加の場」や「情報」に接することが出来ます。

会長から何か書くようにと言われて逃げ切れず、会員の皆様への活動参加のお誘いと「新規会員勧誘」の意図をもって、長期幽霊会員の時期を経た一会員の駄文を記させていただいた次第です。

以上

古浄瑠璃の世界

えちごのくに かしわざき こうちほういんごでんき
「越後国・柏崎 弘知法印御伝記」

日時：2013年3月5日午後6時30分～8時30分
会場：港区立麻布区民センターホール（定員200名）

プログラム (1) 弘知法印御伝記について

えちごかくたゆう
解説：越後角太夫

(2) 上映／「大英博物館から蘇った幻の古浄瑠璃 東京見参!!」

越後国・柏崎 弘知法印御伝記 (50分) 制作：株式会社ビューキャスト

(3) 古浄瑠璃について（日本語）（20分）

お話し：ドナルド・キーン

英訳：平井史朗

(4) 浄瑠璃 「弘知法印御伝記」三段目 (30分) 弾語り：越後角太夫

「江戸時代、鎖国の元禄期に、禁を犯して長崎の出島から他の資料とともに海外に持ち出され、大英博物館で人知れず眠っていた『越後国・柏崎 弘知法印御伝記』という古浄瑠璃の台本があり、それが1962年に、浄瑠璃の研究者によって発見され、300年ぶりに越後で人形浄瑠璃として甦り上演された、という不思議な話が、一昨年のお正月に1時間番組としてテレビで紹介されて、とても面白かった。取り上げてみてはどうでしょう？」という提案が委員会で出ました。興味をそそられる話ではありますが、「古浄瑠璃」はあまり馴染みがないし、一般の方から関心を持ってもらえるだろうか。」と、委員会では少々躊躇いたしました。

その時、「日本文学の碩学ドナルド・キーン先生が、大変関心をお持ちなので、お願いすれば、数奇な運命をたどって蘇った、この『弘知法印御伝記』について、キーン先生ご自身がお話し下さるかもしれませんよ。」と、キーン先生と親交のある会員のご意見と大変なお骨折りのお蔭で、今回、夢のようなプログラムが実現いたしました。

公演の当日は、開場前から日本人ばかりでなく、外国人も含め、大勢のお客様がお越しくださいました

プログラム1 「弘知法印御伝記」について：越後角太夫さんによる説明

この「弘知法印御伝記」は、越後の国の西生寺に日本最古の即身仏として、今も安置されている弘智法印にまつわる伝説をもとにして、荒唐無稽な虚構を加えた、高僧の一代記です。この物語は六段から成り、人情味あふれる浄瑠璃に仕立てられています。

日本に現存していない、江戸時代1685年に出版された浄瑠璃「弘知法印御伝記」の正本が、ケンブリッジ大学で教えておられた浄瑠璃研究家の鳥越文蔵博士（早稲田大学名誉教授）によって、1962年に大英博物館の和書の中から発見され、「古浄瑠璃集[大英博物館本]」として復刻され、陽の目を見ることになりました。



本日は有難いことに、発見された恩人でいらっしゃる鳥越文蔵先生がわざわざご来場下さっています。

この「古浄瑠璃集」をご覧になった鳥越先生の友人であられるドナルド・キーン先生（コロンビア大学名誉教授）が、越後出身の私・角太夫に、「この古浄瑠璃を復活したらどうだろう」と、上演をご提案くださいました。

そこで、文楽座時代の友人で、佐渡在住の文弥人形の遣い手である西橋八郎兵衛さんとともに「越後猿八座」を立ち上げ、約300年ぶりの2009年、「弘知法印御伝記」を復活・初演するに至りました。

物語のあらすじは、越後の弥彦の長者の息子・大沼弘友が放蕩の限りをつくし、それがもとで妻の柳の前を亡くします。弘友は改心して出家し、幾多の困難を乗り越えて悟りを開き、即身仏となり、西生寺の御堂に祀られるまでの物語です。実は弘知法印は観音大師の生まれ変わりであり、妻の柳の前が息絶える時に胎

内から生まれ出た赤子（次男）は、狼にくわえられ連れ去られるが、その狼は実は弥彦権現の化身であったという不思議な物語です。

なお、室町中期に発生した「浄瑠璃語り」は、1686年に竹本義太夫が近松門左衛門の「出世景清」を語って大成功をおさめ、義太夫節が確立しました。それ以前の浄瑠璃が「古浄瑠璃」と呼ばれています。

プログラム2 テレビ番組「大英博物館から蘇った、幻の古浄瑠璃 東京見参!! 越後国 柏崎 弘知法印御伝記」(株式会社ビューキャスト制作 約50分) の上映。

映像は、「越後国 柏崎 弘知法印御伝記」が復活上演されるにいたるまでを、わかりやすく、興味深く、紹介されていました。

何故、いかなる経緯を経て、鎖国中の江戸時代にも拘らず、古浄瑠璃「弘知法印御伝記」の正本が、幕府の禁を犯して海外に持ち出され、それが大英博物館の中で、眠り続けていたのか。

日本に残存していない「弘知法印御伝記」の正本が、1962年、どういうきっかけで、浄瑠璃研究家の早稲田大学名誉教授鳥越文蔵先生によって発見され、それが「古浄瑠璃集[大英博物館本]」として刊行され、それが、キーン先生の目に留まったのか。

そして、これをご覧になったドナルド・キーン先生が、越後に住む「浄瑠璃演奏者の越後角太夫さん」と、佐渡に住む「人形遣いの西橋八郎兵衛さん」に、何故、「復活してはどうか」とご提案されたのか。

このお二人が、越後を舞台とする300年前の素朴な人形浄瑠璃を、想像を超える努力と苦闘を繰り返しながら、現在、昔の形を想像しつつ、上演するまでのご苦労の数々。

古い台本は見つかっても、古浄瑠璃は口伝で継承され伝わっていない。そこで、越後角太夫さんが、佐渡に今も残る古い曲を参考にしながら、研究し、苦労を重ねながらご自分で作曲していく過程。

また、佐渡の人形師である西橋八郎兵衛さんが、登場する素朴な1人遣いの人形の、1体1体の首(かしら)を、自身で木を彫り削りながら、魂を込めて彫り上げていく過程。

再演を目標に「越後猿八座」を立ち上げ、地元で応募された座員たちが稽古に打ち込む情熱。

それらすべてが絡み合いながら盛り上がり、越後のご当地物の説経浄瑠璃が300年ぶりに、人形浄瑠璃として蘇った様子が感動的に紹介されていました。

偶然が重なって蘇った、荒唐無稽で素朴な昔の物語への興味が高まりました。一度消えてしまった昔の芸術を蘇らせることの大変さと熱意に、心打たれました。

プログラム3 コロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン先生のお話し 「古浄瑠璃について」

(キーン先生は、古浄瑠璃について公の席でお話されるのは初めてと伺いましたので、なるべくそのままの形で掲載させていただきます。)

「古浄瑠璃はどういうものですか」と聞かれたら、まず、簡単に、「現在の文楽と似たものです」と答えることができます。つまり、古浄瑠璃と文楽は、ともに、三つの異なる要素から成り立っています。

一つは、浄瑠璃語りです。太夫によって語られます。

二つ目は、三味線の音です。太夫の傍に、三味線を弾く人が座ります。

三味線の音は伴奏となります。それだけでなく、その伴奏の音によって浄瑠璃の位(くらい)が決まることがあり、また、テンポが変わることがあります。

三つ目は、人形です。舞台の上で物語の進行に従って、それぞれの人形が操作されて動きます。

これらの三つが古浄瑠璃と文楽の共通と言えます。

「文楽」という名称自体は、明治時代からのものです。人形浄瑠璃一座の座長である「植村文楽軒」という人が、自分の「文楽」という名前を、人形浄瑠璃という芸術そのものに名づけました。



現代では、日本の代表的な伝統芸術であり、大阪に本拠を置く、三人遣いの人形浄瑠璃が「文楽」という名前で呼ばれています。

「浄瑠璃」という名称はどうかと言いますと、美人のお姫様の名前に由来しています。浄瑠璃という語源は、元々は、仏教語で「清らかな」という意味ですから、女性の名前に適切な名称と言えましょう。

義経がまだ牛若丸と呼ばれていた若い頃のことですが、自分の兄である源頼朝に追われ、捕まらないように、なるべく早く北へ、奥州へと向かって急いでいました。

その途中、三河の国の或るところで、義経が比類ない美人を一目見て惚れてしまいました。そのお姫様の名前が「浄瑠璃姫」だったのです。

その物語の発端は、ある夜義経が歩いていた時、偶然お屋敷の塀の中から、琴の音が聞こえてきました。とてもきれいな曲でしたので、義経は自分の笛を出してそれに合わせました。見事に琴と笛が調和して、綺麗な音楽になりました。すると、家の中にいた美しい浄瑠璃姫は、義経に、「どうぞお入り下さい」と誘い入れて、一緒に話をしました。話している内にだんだん惹かれ合いました。初めの内浄瑠璃姫は、やはり「清い」という名前ですから固く断っていました。でも、時間と共にお互いに愛情を感じ、愛し合いました。

しかし残念ながら、義経はそこに留まることは出来ません。どうしても、追手を避けてももっともっと北の方へ急がなければならなかったからです。

今晚、私はその長い話を全部語っている時間がありません。が、当時、その浄瑠璃姫の恋物語の語り物は非常に人気がありました。中世の日本には、娯楽が非常に少なかったから、語り物を聞くこと以外には殆ど楽しみがなかったからです。

1531年に書かれた書物の中に、琵琶法師が「浄瑠璃物語」などを語っていたということが、書かれています。法師というと、お坊さんのように聞こえますが、必ずしもそうとは限りません。多分、法師はお坊さんのように、頭を丸めて、黒い衣を着ている方がより自由に歩くことができたからでしょう。

「琵琶」は、中国から入ってきた大変きれいな音楽を奏でる楽器ですが、だんだん困ったことが起こってきました。というのは、浄瑠璃を語る人がますます劇的に、高揚した声を出すようになってきたため、琵琶のような優しい音では、もの足りないと思われてきたのです。

その頃、もっと強い音を出せる「じゃみせん」（三線）という楽器が琉球から渡来してきました。その頃の「じゃみせん」は、今もそのままに沖縄に存在しており、私は昨年沖縄に行った折、その音を聞きました。日本において、その「じゃみせん」が今の三味線に発達しました。

16世紀の末あるいは17世紀の初め頃に、人形が、他の二つ要素（浄瑠璃語りと三味線）と一緒になりました。人形芝居は古く、平安期からあったことが、当時の書き物に載っています。

人形を操る人たちは、日本人と違う風貌を持っていたようで、どうも日本人ではないようだ、と書物に書かれています。では、どこから来た人達であるかと言えば、一つの想像としては、中近東から来た人たちではなかったかと思われます。というのは、当時の日本語で、人形のことは「傀儡（くぐつ）」といわれましたが、ギリシャ語、ブルガリア語、アルバニア語、トルコ語、そして、ロシア語に、「くぐつ」に近い言葉が今でも残っています。

ともかく、17世紀の初めに「古浄瑠璃」は生まれたといえます。だんだん全国へ広まり始めましたが、その話の内容は、比較的宗教的な話、例えば、お寺の歴史とか、お宮の神様の奇跡とかいう内容の話が多かったといえます。

近松門左衛門の「世継曾我」は1683年に上演され、成功をおさめました。それを境に、浄瑠璃の内容がずい分変わりましたのでそれ以前のものを、古浄瑠璃と言っています。別の説もありますが、年代はあまり変わりません。

古浄瑠璃にあるような奇跡とか、幽霊とか、鬼とかというような存在の代わりに、歴史的人物とか、ある

いは、伝説的人物が主人公として取り上げられるようになりました。

形式からいうと、古浄瑠璃と浄瑠璃は同じ三つの要素で出来ていました。が、見る側の観客の態度が随分変わりました。芝居を観る目的は、説教を聞くことではなくなり、娯楽のためのものになりました。

とはいっても、近松の浄瑠璃がますます人気が出て来た後でも、信心深い当時の人たちは、まだ古浄瑠璃を喜んで観ていました。しかし、相対的に、聴衆の浄瑠璃に対する態度は、浄瑠璃と古浄瑠璃では違っていたといえます。

現在も、佐渡に説経節とか文弥節が存在しており、その中に古浄瑠璃の伝統が残っています。近松の浄瑠璃が大変な人気が出た後でも、ここでは、新しい古浄瑠璃が作曲され、聞かれて生き残っていたのです。

今夜、私たちが聞く**弘知法印御伝記**は、近松門左衛門の世継曾我より2年後に書かれたものです。

幸いなことに、古浄瑠璃の台本が大英博物館に残っていたのですが、音楽は当然、全く失われていました。

古浄瑠璃を復活しようと思った角太夫さんは、曲については、今も佐渡に残っている、わずかな説経節とか文弥節を基本にして、新たに、殆ど全部自分で作らなければなりません。このように彼は、なるべく古い浄瑠璃と同じ調子で、昔の言葉に合わせて、作曲しようと苦労しました。



7～8年前に、私が初めて角太夫さんと親しくなった頃、角太夫さんは、「古浄瑠璃の復活は、私の一番やりたいことです。」と、私に言いました。彼にはそういう希望を実現するだけの資格と能力を十分具えていました。というのも、25年間もの間、人形浄瑠璃文楽座の一人として三味線を弾いていましたし、また、浄瑠璃の語りも上手に出来たからです。

しかし、角太夫さんは、古浄瑠璃の復活の仕事をどこから手を付け始めたらいいかと、躊躇していました。その時、私はその目的に合う、非常に適切な本「古浄瑠璃集[大英博物館本]」を思い出しました。

数年前に、早稲田大学の演劇博物館の館長をしていた鳥越文蔵教授から「古浄瑠璃集[大英博物館本]」を貰っていましたので、あの本がきっと役に立つと思い、話しました。角太夫さんはその中から、今晚私たちが聞く古浄瑠璃「弘知法印御伝記」を選んで、やってみようということになりました。

なお、鳥越教授がこの古浄瑠璃を見つけたのは、大英博物館の中でした。当時ケンブリッジ大学で教えていた鳥越教授は大英博物館の蔵書の中にある古い和本を丁寧に調べていましたら、日本に知られていない古浄瑠璃の台本を見つけました。これらは鎖国時代に印刷されたものでした。

私は、最初その話を聞いた時は驚きました。江戸時代の鎖国時代に外国人は日本に入って本を買うことはできませんでしたし、また、日本から日本の書物を、海外に送ることも禁止されていました。「では、どうして大英博物館にあるのか」といろいろ考えました。そして、簡単な理由に思い至りました。

鎖国時代、長崎湾の小さな島・出島（当時の名前はデシマで、今は、デジマと呼びます）に、海外との窓口として、オランダ商館がありました。この謎をとく鍵は、そのオランダ商館にあったのです。

鎖国をしていますから、日本人は外国に行くことは出来ませんので、外国の様子がわかりません。しかし、幕府としては、「外国は現在何をしているか」、「日本に対する敵意はないだろうか」、「日本が外国の事で、知べきことはないだろうか」などの状況を、どうしても知っておく必要がありました。

だから、幕府からの言いつけで、オランダ人たちは毎年、「オランダ風説書」を書かされ、その中に、1年間のヨーロッパの事情を書いて、幕府に提出しなければなりません。幕府はそれを読んで、「何も別に恐れるような怖いことはない」と知って、一種の安心感を持っていたのです。

当時そのオランダ商館には、オランダ人商人が5～6人いましたが、彼ら商人は日本に全く関心がなく、「早くお金をもうけて、世界の果てである長崎を出てオランダに帰りたい」ということだけが彼らの望みでした。

幕府は親切なことに、出島に住むオランダ人は病気になることもあるだろうが、日本の医者では外国人の独特の病気を治すことはできないだろうと考えて、1人の外国人の医者を出島に一緒に住むことを許しました。

その医者の中に、日本に深い関心を持つ人たちがいました。中でも一番有名になったのはケンペルというドイツ人でした。原則として、オランダ人でなければ、出島に住むことが出来なかったのですが、そのケンペルというドイツ人はかなり上手にオランダ語を話せました。が、少し訛りがありますので、通訳は、「オランダのどの地方出身ですか？」と尋ねましたら、「オランダの山国の出身です」と答えたということです。ご存知のように、オランダには山は一つもないのですが。

ともかく、彼は日本の事を知りたいと思って、日本人の通訳と仲良くなって、彼の協力を得ながら、日本の歴史と伝統を調べました。その有名な医者であるケンペル（Engelbent Kaempfer）はわずか2年間、つまり、1690年から1692年までしか出島に滞在しなかったのですが、素晴らしい本、「日本誌」を書きました。

彼は日本を出た後、ドイツに帰るつもりだったのですが、ドイツは当時30年戦争中でしたので、ドイツに入れず、オランダに亡命しました。

オランダにいる間に、自分が日本から持って出た本を、理由はわかりませんが、自分の甥に上げました。その甥が英国に渡って、英国の金持ちであるハンス・スローン卿（Sir Hans Sloane）という人に会いました。スローン卿は、大英博物館の創立者です。スローン卿は、自分の新しい博物館のために、どんなに高くても珍しいものを探して買っていました。その中に「弘知法印御伝記」があったというわけです。

というような理由で、250年前から、この浄瑠璃の台本は、大英博物館の資料室に眠っていたのです。そして、鳥越教授が見つかるまで、誰もその存在をすら知らなかったのです。

実は、私は鳥越教授よりも先に大英博物館の図書館によく行っていました。私はその台本・浄瑠璃本を見ても、日本にない本だとはわからなかったのです。ところが、大変な専門家である鳥越先生はそれをみて、「これは日本にないものだ」とすぐにわかったのです。

そういうことで、鳥越先生と越後角太夫さんの並々ならぬ努力のお蔭で、「眠れる美人」がやつのことで、目を覚ましました。その美人に、今晚、私たちは会うことになりました。有難うございました。以上

90歳とは思えない、力強いドナルド・キーン先生の、ユーモアあふれる、味わい深い語り口で話される、不思議な古浄瑠璃の蘇りのお話しに、会場の皆様は聞き入っておられました。

ご出席されている外国人のために、キーン先生の秘書の平井史朗さんが、お話のあらましを英語で話して下さいました。



プログラム4 越後角太夫による三味線の弾語り（弘知法印御伝記 三段目）

弾語りの越後角太夫さんのプロフィール

1950年、新潟市西蒲区生まれ。東京外国語大学フランス語学科卒。1972年、国立劇場・文楽研修生第一期生となる。その後人形浄瑠璃文楽座で鶴澤浅造（五世）の芸名で三味線弾きとして舞台を勤める。1997年に退座し故郷に戻る。現在は古浄瑠璃（義太夫節以前の浄瑠璃）の作曲と三味線の弾語りを中心に活動中。

当日は、全六段のうちの、三段目の全て（三十分）を弾き語りされました。三段目の話の内容は、下記のとおりです。



主人公の大沼弘友は、妻の柳の前の死をきっかけに改心し、出家しようと高野山を目指します。その旅の道中、夜を明かした五智国分寺で、亡霊となった柳の前が現れます。亡霊は恨みを語りますが、ことの成り行きと弘友の発心を聞いて安心します。居合わせた弘法大師の引導により弘友は弘知の名を授かります。高野山の途中の紀州路で美しい娘に化けた魔王が現れ、修行を邪魔しようとはしますが、数珠が般若の利剣となって追い払い、弘知は高野山へ向かいます。(三段目)

角太夫さんの凜と響く、三味線の弾語りは、しばし、時空を超えて、この会場に昔の美女を呼び戻してくださいました。

お蔭様で、大盛会のうちに、終了いたしました。

「越後猿八座の人形も加わった公演を見たかった」と言う声が聞こえました。

不思議な巡り合わせを経て、たいへんなご苦勞の末、現在に蘇った、素朴で、庶民的な越後の人形浄瑠璃が、これからも、生き続け欲しいと願わずにはられません。



終了後、ホール内にて

昨年日本国籍を取られた、ドナルド・キーン先生のますますのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。
(会長 高井光子)



2013 年度年度 総会 無事終了

日時：2013 年 4 月 24 日（水）19:00～20:30

会場：港区立生涯学習センター305 号室

総会は、松本副会長の司会で始まりました。

高井会長から、「2012 年度は創立 31 年目という、新たな区切りの始まりの年でした。この 1 年これまでと同様、国際都市・港区ならではの活動、港ユネスコ協会らしい活動が、皆様のご協力のお蔭で無事計画通り終えることができました。皆様とご一緒にお喜び申し上げます。これから始まる新しい 2013 年度も引き続きご協力、ご尽力をお願いいたします。」との挨拶がありました。



小池教育長

港区役所からは、小池眞喜夫教育長、白井隆司生涯学習推進課長、五十殿康代生涯学習係長、矢ノ目真展主事、三輪悦子担当が出席されました。

小池教育長から当協会の益々の活躍を期待される旨の激励のご挨拶がありました。



2012 年度の事業報告、決算報告、監査報告、そして 2013 年度の事業計画、予算が承認されました。3 月末に辞任の申し出をされた中川統夫副会長に代わって、永野博理事が副会長に就任する案も承認されました。出席者は 29 名でした。
(事務局長 富田晴雄)

ペルーの家庭料理

日時：2013年3月16日（土）12：00～15：30

会場：港区立男女平等参画センター4階 料理室

講師：大貫 テレサさん

今回の世界の味文化紹介は、日本人考古学者のご主人を持つ大貫テレサさんを講師に迎えて開催しました。テレサさんは、穏やかで静かな口調でありながら凛としている方で、外見は美しい大和撫子の雰囲気を持った女性です。

ペルー人は、朝晩に沢山スープを飲み、パーティでは「くい」を食べ、夜遅くまで飲んだり踊ったりすることを話してくださり、マチュピチュなど有名な観光地だけでなく、北の方にも素晴らしいところがあるので、是非行って欲しいと紹介して下さいました。

メニューは、テレサさんが小さい時からなじんできたというお料理ばかりです。

実習はスムーズに進行し、どれも美味しくできました。日本の家庭でも十分に楽しめるお味だと思います。



○ソーパ・ア・ラ・ミヌータ（牛挽肉のスープ）
赤身挽肉とカベジョ・デ・エンジェル等が入ったスープ。カベジョ・デ・エンジェルは天使の髪の毛という意味で細い麺。素麺でも可。肉の出汁やニンニクの味が効いていて、沢山飲めてしまい、くせになりそうな味。

○セビチェ・ミスト（ペルー風魚介のマリネ）
いか、たこ、えび、白身魚の新鮮な素材にレモン中心の味つけ。シンプルなはずなのにまとまりのあるしっかりした料理。

○アロス・コン・ポーヨ（鶏と緑色のごはん）

鶏肉の焼汁や水、ビール、香菜、グリーンピース等をミキサーにかけた汁で炊いたごはん。斬新な作り方で出来上がりの味が想像できなかったが日本人にも馴染む味。

○マサモラ・デ・キヌア（キヌアの汁粉）

この日のメニューで一番エキゾチックな味。米とキヌアを煮詰めて、ミルク、ココナツなどで味付け。少し重たいデザート。

参加者の皆様にも好評で、皆さんと一緒にペルーへの思いを深く致しました。

ありがとうございました。

（世界の料理委員会 金澤由里）



2013年度「新入会員を囲む会」和やかに開催！

日時：2013年5月16日（木） 18：30～21：00

場所：港区立生涯学習センター305号室 および 事務局

昨年度は申込者がたった一人という理由で、この事業はお流れとなった。その後1年間誠に口惜しい思いをしたものだ。何時も「やれなかった」、あるいは、「やらなかった」の二つの気持ちが消えることなく、続いていたのである。言いかえれば、自分がモットーとしている「やらないで後で悔やむより、やって失敗しても、やったほうがいい」精神がすっかり消えていたのだ。自分自身に問う。「該当者一人一人に丁寧にコンタクトしたか？」「ノー」である。今年は、料理や英会話初級の受講生の方がたが、6人もご参加下さった。これまさに、関係各位の温かいご理解とご協力の賜物以外の何物でもない、と確信している次第だ。今年こそ何が何でも「やるんだ」の一念がきっと天に届いたのだろう。

最近入会者が減少している現状を省みると、ご入会いただいた方がたを、熱烈歓迎し協会の内情をご紹介、ご活躍のチャンスを用意するのは、私たち全会員の義務であり責任だと、心も新たに、思い起こす次第だ。

「新入会員を囲む会」第一部が、まずスタートを切った。司会進行は友金常任理事が担当、議事を進行させた。

まず、高井会長から開会の挨拶があった。簡潔明瞭な挨拶は、人に耳を傾けさせ、注目させた。中には、メモを取る人もいた。熱心だ。会長のご挨拶の概要は次のとおりであった。

— 皆様をお迎えできますこと大変嬉しく存じます。当協会は1981年10月に設立し、今年度は32年目に入ります。1980年頃、港区長や港区教育委員会から、「国際都市として日本の最前にいる港区だから、国際的な活動をする組織が欲しい」という要望に応じて、財界人、文化人、教育関係者、地元で地域活動をされている方がたから成るMUAが誕生しました。以来30数年、港区からの財政的な支援も頂きつつ、会員のボランティアによって、2本の柱に沿った多様な活動が企画・運営されています。1) 国連のユネスコの理念に則った活動：世界の識字教育を推進するためのユネスコ世界寺子屋運動、世界遺産の保存・支援活動、平和を守る活動、青少年育成などを旨とする活動。2) 港区の国際都市という地域性を生かした、国際理解・国際交流を進める活動です。

ボランティア活動に参加することは、社会や世界に貢献することであると共に、多くの人と知り合い、力を合わせて活動するという経験は、個人的にも大きな意義を持つのではないのでしょうか。皆様にも、積極的にご参加・ご協力賜りますようお願いいたします。—

その後、秋山常任理事から新会員の紹介がなされ、各人起立した。続いて、恒例の各委員会活動の説明が、委員長または、



担当常任理事が行なった。持ち時間が少ない事もあり、より良く委員活動を理解いただくため、更に準備と工夫が必要と感じた。例えば、毎年使用している「パネル」の使用など目に見える、すなわちヴィジュアルな方法で、印象つけることが重要ではなかろうか。来年に向けて、宿題としたい。



その後、第二部の「懇親会」を事務局で開催、秋山常任理事の乾杯で始まった。事務局や会員開発委員会で用意された、心のこもった食べ物をいただきながら、互いに話し合い、微笑ながら、なんとも言い難い楽しい雰囲気の時が流れた。このような雰囲気を感じたのは、私の23年余のMUA生活で初経験だ。

その中で自己紹介が始まった。各自が自分を売り込む最適なチャンスだ。



最後に、もう10年も前のことだが、三輪公忠前会長から、「友金さん、共に食することはいい事です」というお言葉を頂いた。この「名文」は、今も強烈に脳裏に残っている。MUAサロンや新年懇親会で、皆さんと共に食しながら、活発なMUA活動を促進して行きたいものだ。まず「行動、アクションだ！」。

(会員開発委員会担当 常任理事友金守)

事務局便り

【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆7月2日（火）18:30-20:30 国際理解講演会「変化するアジア現代アートの現況」
講師：南條史生・森美術館長
- ☆7月19日（金）18:30-20:30 MUA サロン 発表者：塩瀬正明会員
- ☆7月20日（土）12:00-15:30 「ブータンの家庭料理」
講師：渡辺千衣子・日本ブータン友好協会と留学生

【ご寄付、ご寄贈品などの、ご協力ありがとうございました】

- (A) 日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金（就学支援奨学金として）日ユ協連へ送金。
☆3月5日（火）日本文化紹介—古浄瑠璃の世界「弘知法印御伝記」 会場での募金 ￥59,399
- (B) ミンダナオ子ども図書館へのご寄贈品
☆ブラウス、シャツ、子ども服など。 寄付者：葛西章江様、鈴木明美様、高井光子様、永井美智子様
- (C) 平和基金へのご寄付：永野博様(¥10,000), 王黄恵様(¥10,000)

【ご協力をお願い】

- *日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金 常時受け付け中です。
- *ミンダナオ子ども図書館への寄贈品（衣料品など：新品・中古品[洗濯済]、除・毛織物）。事務局まで。

港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>

■編集後記

◆このところ安倍首相の村山談話・河野談話に関する発言や橋下大阪市長の従軍慰安婦や風俗活用に関する発言が国内外で物議を醸している。十年一日の辟易である。一方、カンヌ国際映画祭では是枝裕和監督の『そして父になる』が審査員賞を受賞した。パルムドールにあと一步であった。この国は政治家が与えたダメージを文化人の功績がカバーする構図が定着しているようだ。ジャパンクールを応援する所以である。（須田康司） ◆Golden Week 中、東久留米にある顧想園（村野邸）という立派な古民家を見学する機会に恵まれた。1838年に建てられたという藁葺き屋根の主屋、離れ、蔵、門などの建造物を、樹齢二百年にもなる樺、白樺、杉等の屋敷林が囲んでおり、きれいな庭園に加えて、自家用の茶畑まであった。今回は特別に蔵内にも入れて頂き、由緒のある陶器、掛軸、絵画等、すばらしい美術工芸品も拝見することができた。最後に、柳窪という地名の付いた小麦からつくられる特製饅頭とお茶を賞味しながら、ゆったりと地元の文化・歴史を「Think locally」することができた。（棚橋征一） ◆棚橋さんのように、埋もれている貴重な事物・イベントの紹介は難しいことだ。編集後記に何を書くか、小生の場合、事務局長の感想記になりがちである。今年、初めて決算を経験したが、中小企業の悲哀はこんな感じかと、失礼ながら実感させられた。補助金を使い切ることが目標になっていたのも、苦労したが、考えてみれば、本末転倒である。しっかり企画を実行し、当協会のミッションが実現できれば、補助金は二の次で良い筈である。と考えれば、少しは楽になる。効率化、儉約に努力して、経費節減はまだまだ余地がありそうだが。（富田晴雄） ◆110 万部突破！！「いい言葉はいい人生をつくる」（斉藤茂太著）を数年前に購入したまま本棚の端に眠っているのに、ふと目がとまりました。その中で、今、私に役立つ3つの言葉。(1)「運命はわれわれに幸福も不幸も与えない。ただその素材と種子を提供するだけだ。（モンテーニュ『エッセー』）」(2)「やさしい言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっと心にこだまする。（マザー・テレサ）」(3)「腹の立ったときに、小言をいうな。（新島襄）」（高井光子）